

### 第三講 レバントにおける農耕文化の誕生

【レポート課題】：人はなぜ食糧を生産するようになったのか。

#### 氷河期の西アジア

レバノン山脈 - タウロス山脈 - ザグロス山脈：

傾斜面：カシ・ピスタチア・オリーブ・イチジクなどの灌木林

高地：マツ・イトスギ・レバノンスギなど

内陸部：

草原：アカザ・ヨモギ属

中間帯：カシ・ピスタチア・アーモンドなどの疎林帯

10,000BP：気温の上昇と乾燥化

森林の縮小とサバンナの拡大

身近にある野生種の動植物を利用：麦（森林周辺のステップ）・豆・ヤ

ギ（山岳地帯）・羊（草原）・豚（森林の入口）

レヴァント地方で早く体系的な穀物利用の試みが始まる。

↑

自然環境の変化が生じている

樹木花粉値が 50%を超えるのが

パレスティナ（フーレー）：11,540 ± 100BP

シリア西部（ガーブ）：10,080 ± 55BP

ザグロス（ゼリバール）：5,460 ± 120BP

↓

森林の出現を表すが、森林の卓越期間は 2~3000 年間

西アジアにおけるムギ・マメ類および中型群生草食動物（ブタ：森林、ヒ

ツジ：草原、ヤギ：山岳）への依存を強めた人間集団の存在

牧畜は農耕よりも二千年ほど遅れて発生

先土器新石器時代（PPN：1.03-0.8 万 BP）

尖頭器で識別

先土器新石器時代 A 期 (PPNA : 1.03-0.96 万 BP)

竪穴住居から方形プランの地上型住居へ

石核と押圧型剥離技法の出現

大型尖頭器

先進的な鎌刃、磨製石斧、石皿、土偶、土器

先土器新石器時代 B 期 (PPNB : 0.96-0.8 万 BP)

レバント全域に拡大

北シリアの湿潤化による大草原地帯にナトゥーフ人は着目、利用

テル=アブ=フレイラのナトゥーフ期、先土器新石器 A および B 期

ナトゥーフ期 (中石器時代 : 1.1-1.03 万 BP) : 157 種類の可食性植物

種子

30 種類以上のイネ科、21 種類以上のマメ類

それらの中にコムギ、オオムギ、レンズ豆など重要な植物が含ま

れる

PPNA (新石器時代 : 1.03-0.96 万 BP) のムレイビット III 層

(9600BP) . . . 北の草原地帯

湿潤化 (フーレー湖 花粉帯 A-2)

コムギとオオムギ (野生種) が 1 - 2% から 60% に増加

↓

特定の野生種の植物に依存し始める (人間による選別)

PPNB (新石器時代 : 0.96-0.8 万 BP) . . . 北部シリアからレバント

全域に拡大

資料 3 下 : 乾燥化 フーレー湖 花粉帯 B

5 種類の栽培種のイネ科 (70%) と 3~4 種類のマメ科 (15%)

に依存

ヒツジやヤギの中型動物の家畜化

↓

レンガ瓦や石による方形プランの住宅

10ha 以上の小都市の形成

175 人／1 ヘクタール→1750 人以上の小都市



森林破壊の進行

10.000BP（プレボレアル期）よりの乾燥化の進行

草原地帯の可耕地の減少→農耕文化の行き詰まり→都市  
の形成→強制的な土地利用



パレスティナの空間的限界

#### 参考文献

常木 晃「西アジア型農耕文化の誕生」『講座 文明と環境』3、  
朝倉書店、1995 年。